

新たな学校水泳授業の実態調査および児童・生徒の学習ニーズ調査 に基づく水泳授業の在り方についての考察

竹内 萌人（筑波大学）

1. 目的

本研究では、学校プール施設の老朽化に伴う学校水泳授業の廃止が問題となっている世情の中で、教員および児童・生徒へのアンケート調査を通して、新たな水泳授業の実態および、児童・生徒の水泳授業に対する学習ニーズを明らかにし、これからの時代に合った水泳授業の在り方を考察することを目的とした。

2. 研究方法

調査を実施する上で、従来型の学校水泳授業に加え、新たな水泳授業の在り方として学外施設利用、地域移行の水泳授業の形に着目し、昨年度と今年度の水泳授業の比較によってそれら3つの水泳授業の利点と問題点が分析できるように教育委員会の方と協力して調査対象の学校の選定・依頼を行った。

- 1) 調査方法：Google フォームを用いたオンラインでのアンケート調査
- 2) 対象者：I 県 T 市の小中学校 9 校の教員(総回答数 78 名)、児童・生徒(総回答数 1547 名)。

3. 結果と考察

1) 新たな水泳授業の実態

児童・生徒、教員それぞれの視点において、学校プールよりも学外施設利用や地域移行の水泳授業の形が望まれていることが示された一方で、現状では、学外施設利用や地域移行の水泳授業には移動や引率に関する新たな負担、授業回数の減少、バス不足、授業実施者・評価等の様々な課題があり、全面的な推進は難しいことが明らかになった。また、教員のための授業実施では学外施設利用でも人手不足問題が解決されていないことから、これからの水泳授業の在り方については、学校プール施設を廃止しようとする世情を改め、学校の周囲の環境に合わせて学校プール、学外施設利用プー

ル、スイミングスクールを柔軟に利用し、教員主体の授業の中で外部指導者を積極的に取り入れながら実施していくべきであると考えられた。

2) 児童・生徒の水泳授業へのニーズ

水泳授業の満足度が泳力レベルに依存している結果が示されたことに加え、泳力レベルに関わらず、必要以上の泳法練習は授業の好感度を低下させるリスクになることが明らかになったことから、ある程度の泳力を身につけさせるための泳法練習の必要性が示された一方で、泳法練習ばかりの授業内容にならないような注意が必要であると考えられた。そして、児童・生徒の水泳授業へのニーズ調査の結果、遊び要素、自由時間、友達との関わり合いの3つの需要が大きいたことが示されたことから、それら3つの視点を含めた授業内容を決定していく必要があると考えられた。また、泳力レベル別の需要として、泳げない子どもたちについてはできないことができるようになる体験を重視した段階的な指導内容が重要であり、指導の中でも遊びに関する要素を積極的に取り入れることで、学習意欲が高まると考えられた。泳げる子どもたちについてはつまずきの多いクロールの息継ぎに関する指導等に留意し、ニーズの高かった水球やスキndaイビングといった競泳以外の水中運動などを取り入れることで、泳法指導のみに囚われない楽しさを重視した水泳授業の実践が求められる。

<主な参考文献>

- 1) 佐藤 友音・池田 拓人(2020) 小学校体育における水泳授業の実態に関する研究～目標・内容・方法に着目した課題の描出～, 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 70, 109-116, 2020.